

平成 21 年度 大台ヶ原自然再生推進計画評価委員会  
 森林生態系保全再生手法現地検討会  
 議事概要

◆日 時 平成 21 年 9 月 14 日 (月) 12:00 ～ 平成 21 年 9 月 15 日 (火) 12:00

◆場 所 奈良県吉野郡上北山村大台ヶ原

◆出席者

<委 員>

木佐貫 博光	三重大学 准教授
高田 研一	高田森林緑地研究所 所長
野間 直彦	滋賀県立大学 講師
日野 輝明	独立行政法人森林総合研究所関西支所 野生鳥獣類管理チーム長
松井 淳	奈良教育大学 教授
村上 興正	元京都大学 講師

(以上敬称略)

<事務局>

近畿地方環境事務所	上村 邦雄	野生生物課長
	角 智則	自然保護官
	櫻又 涼子	自然保護官
吉野自然保護官事務所	濱名 功太郎	自然保護官
(株) 環境総合テクノス	樋口 高志	環境部マネジャー
	保延 香代	環境部リーダー
(財) 自然環境研究センター	永津 雅人	第 2 研究部長

◆議 事

- (1) 第 1 期計画における実証実験の評価について
- (2) 具体的取組の実施箇所および実施内容について

◆議事概要

1. 第 1 期計画における実証実験の評価について

- ・ 植生タイプ I の表層土除去については、A 層 (腐植を含んだ層) のみの除去にとどめる方がよい。土目 (B 層) は残っている方がよい (コケの回復が早くなるため)。ミヤコザサの根茎を除去するために B 層まで剥いだ場合は、B 層は戻した方がよい。
- ・ 表層土除去の効果の評価については、ミヤコザサの抑制効果があることを示しておくこと。
- ・ 植生タイプ II では地掻きを実施しているが、植生タイプ I と同様に表層土除去を実施する方がよい。

- ・ 地表処理を行う場合は明るい場所（ギャップ地など）で実施する方が効果的である。
- ・ ササ刈りについては、植生ごと（植生タイプごと）に光条件を含めて効果を示す。
- ・ ミヤコザサの繁茂を抑制できても、スゲ属、イネ科などの植物が回復すればトウヒ実生の発芽・生育には向かない。
- ・ 地表処理による発芽環境の創出よりも、現時点で植生タイプⅠ、Ⅱで生育している実生・稚樹を保全する方を優先すべき。
- ・ 第1期の実証実験の効果確認調査については、終了してもよい。第2期の取組に必要な場合は継続調査を実施する。

## 2. 具体的取組の実施箇所および実施内容について

### (1) 中期目標②「森林の更新環境の回復」について

#### ◆林床のミヤコザサの抑制について

- ・ ササ刈りについては、防鹿柵内だけでなく、柵外でも実施すべき。
- ・ シカによる被食を受けている柵外でササ刈りをする方がササは早く減るのではないか。
- ・ 柵外のササを減らすことはシカの餌を減らすことにもなるため、個体数の抑制につながる。
- ・ ササがなくなった場合はエロージョンが起きることも想定される。
- ・ 柵内でのササ刈りは労力が非常にかかるため、稚樹や倒木・根株の周りのササ刈りのみにとどめた方がよいのでは。

### (2) 中期目標③「森林後退の抑制」について

#### ◆具体的取組の優先順位について

- ・ 森林後退の場所では、地表処理よりも既存の実生・稚樹の保護を優先する。
- ・ 優先順位は①「樹木減少の抑制」、②「森林更新の場の保全」、③「森林更新の場の創出」である。

#### ◆森林後退の場所における森林更新の場の保全について

- ・ 防鹿柵外の倒木・根株や天然稚樹を保護する簡易柵については、高さ1.5m程度もあれば十分である。間伐材を使った簡易なものでよい。
- ・ 大規模防鹿柵内ではウサギの影響を無視できない。ウサギに対しては、ウサギの食害が著しい場所では必要に応じて対策の検討をすること（ウサギ侵入防止柵など）としておく。
- ・ ミヤコザサが侵入しにくい岩礫地でも実生・稚樹の生育地については簡易柵で保全する。
- ・ 岩礫地の保全は急傾斜地におけるエロージョンの防止効果もある。

#### ◆森林後退の場所における森林更新の場の創出について

- ・ 植生タイプⅠで実施している「表層土除去」については、A層（ササの根茎まで）までの除去とする（B層は除去しない）。
- ・ 表層土除去後の土壌を活用（利用）する（コケを生育させて実生の生育環境を整える）。
- ・ ササの回復に応じてササ刈りを実施する必要がある。

### (3) 中期目標④「森林への遷移に誘導するための手法の検討」について

- ・ 植栽よりも、天然稚樹の保護（柵内ではササ刈り、柵外では簡易柵など）が優先である。
- ・ トウヒ苗木の植栽については、「森林への遷移に誘導するための実証実験手法」として実施する。

- ・苗木の生産については、自然保護団体へ説明できるようなしっかりとした理由付けが必要、「森林の更新環境を整えるため」、「森林への遷移のためのコアをつくる」など。ミヤコザサ草地では、植栽以外のどの手法を使っても森林再生には非常に時間がかかることを示す。
- ・植栽にあたっては、トウヒだけではなく、ヒノキ、ウラジロモミなども植えてもよいのではないかな。
- ・どこに植栽をするのか、場所について検討しておく。
- ・苗木を植栽すべき場所を決定し、現在圃場で育成している苗木では本数が足りない場合には新たに苗木を生産することも検討する。
- ・正木峠に植栽されているトウヒ苗木の中で、生育状況が悪いものがあるが、これは苗木の運搬時に根が乾燥してしまったなどの理由によると思われる。
- ・正木峠内に植栽しているトウヒ苗木のうち、樹冠がミヤコザサの稈高を十分に越えているものについてはササ刈りを取りやめてもよいのではないかな。
- ・トウヒ苗木の周囲のササ刈りを取りやめるには、モニタリング調査を実施するなどして、もう少し検討すべきである。
- ・苗木の周りに刈り取ったササを敷いておくと蒸散を抑える効果があるかもしれない。
- ・小さい稚樹はササ刈りを実施してもウサギによる被食を受けて枯死する場合がある。
- ・ウサギ対策としては、稚樹（苗木）の周りに竹杭を設置するだけでもよいのではないかな。

### 3. パッチディフェンスの効果について

- ・効果は十分あるといえる。具体的取組に向けて、柵資材の小型化、軽量化を図り、人力による施工が可能となるものを検討する。
- ・パッチディフェンスは、柵内のササの活力を抑えるために、現在設置しているものよりも小さい方がよい。
- ・ギャップの大きさに合わせて、柵の設置個数や配置を検討する。
- ・パッチディフェンスの基本的なサイズ、素材について検討し、まとめておくこと。

### 3. その他

- ・森林生態系保全再生手法における具体的取組内容を検討するにあたって、「釧路湿原達古部地域自然再生事業実施計画」を参考にするとよい。

[文責：近畿地方環境事務所]